

## 資料

## 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童における点字読速度発達の比較

牟田口 辰己

盲学校もしくは通常学級で学んだ盲児の読速度発達を検討した。対象児は、1985年4月から2002年3月までに、6年間継続して点字読速度データが得られた小学生40人であり、盲学校在籍が33人、通常学級在籍が7人であった。盲学校在籍児、通常学級在籍児のいずれも学年が進むにしたがって読速度は増加した。盲学校在籍児の読速度の差は隣接学年を除く学年間でいずれも有意であったが、通常学級在籍児では、1年と5年および1年と6年の読速度に有意差がみられ、その他の学年間では有意差がなかった。さらに、盲学校と通常学級在籍児を比較すると、1年、2年、および5年時点の読速度には有意差はなかったが、3年、4年、および6年時点の読速度に有意差があった。

キー・ワード：盲児 点字読速度 盲学校 通常学級

## I. はじめに

視覚特別支援学校（以下、盲学校）の指導の中で点字指導は最も大きな柱であり、学習指導要領（文部科学省，2009）には、「児童の視覚障害の状態等に応じて、点字又は普通の文字の読み書きを系統的に指導し、習熟させること」の記述がある。点字教科書（文部科学省，2011）では、特に読みの指導において導入段階の重要性を考慮し、触運動の統制と触覚による弁別学習や両手読みの動作の制御に関する周到なスモールステップによる学習課題が設定されている。また盲学校では読み書き能力を身につけさせるため、「点字競技会」を長年実施してきた。「読み（速読）」は1分間に読んだ文字数である。「書き」は2分間に書くことのできた文字数であり、ア行からワ行までを繰り返し書き進める「50音書き」、テープに録音された文章を聴きながら正しく書き取る「聴写」、点字

で書かれた文章を読み取ってその通りに書き写す「転写」の3種目からなる。盲学校では定期的に校内点字競技会を開き、さらに全国盲学校長会主催の「全国盲学生点字競技会」が2年に1度、現在も実施されている（全国盲学校長会，2013）。筆者が勤務していたX盲学校小学部においても校内点字競技会を毎学期末に実施し、終業式には各児童にその結果を知らせ、点字の読み書きの力を伸長させる取り組みを行ってきた。

ところで、特殊教育から特別支援教育へ転換して7年目を迎えたが、盲学校へ入学を希望する児童生徒の減少が止まらない。牟田口・進（2012）の平成24年度調査によれば、小学部を設置する盲学校66校中、新入生は88人（1校当たり1.38人）で、このうち点字指導対象児はわずか29人（1校当たり0.45人）、さらに過去3年間いずれもその対象児がいなかった学校は25校（39.1%）に達することが明らかになっている。つまり、小学部1年生には4～5年に1人の割合でしか点字使用の入学者がいないとい

うことになる。このような状況ではあるが、数少ない盲児に対して学校全体で点字の読み書きをテーマにした研究活動も報告されている（佐賀県立盲学校, 2013）。しかし、その対象児の読み書きはどの程度の力なのか、校内でのデータ蓄積は無く、他の盲児との比較ができない状況となっている。

文部科学省（2012）は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育」を打ち出したが、実は我が国の視覚障害教育においては、「統合教育」の名の下、すでに40年近くも以前にその実践が行われていた。それは、1975年春に6名の盲児が公立小学校へ入学したことに始まり、この年は「視覚障害教育統合教育元年」と呼ばれる。6名の1人、浦和市（当時）の小学校に入学した盲児の1年間のドキュメント「友だち100人できるかな」（NHKテレビ, 1976）は関係者に衝撃をもたらした。その衝撃は、保護者自身が教育委員会との交渉から教科書の点訳までを行い、さらに視覚障害教育に理解のある担任教師の教育実践にあった。また番組では、国立特殊教育総合研究所（当時）の研究員が自宅を訪問し、点字指導の場面が放映された。このように十分な専門性を持つ教師の介入がなければ、単に教育の場を共にする形だけのインクルーシブ教育となる。筆者は勤務していたX盲学校でセンター的機能の先導的試行（牟田口・大内・野田・金本・佐藤, 1995）として、通常の学級（以下、通常学級）で学ぶ盲児の指導に携わった。ここでは、特に通常学級で指導が行き届かない点字の読み書き指導など、盲児に必須のスキル獲得を目指してきた。

牟田口・中田（1997）は、21名の盲児を対象に点字読速度の発達を報告したが、本研究では点字指導対象児が激減する全国盲学校と通常学級で学ぶ盲児の点字指導に資するため、さらに対象児を追加して小学校6年間の点字読速度発達の概要を報告するとともに、盲学校と通常学級という就学場の違いによる点字読速度の発達を比較することを目的に実施した。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象児

(1) 対象児数：対象は、1985年4月から2002年3月までの17年間にX盲学校小学部に在籍していた33人と、通常学級で点字を用いて学習していた7人で、全員が1年から6年までの読速度データが継続して得られた40人である。

(2) 対象児の教育課程：対象児に対して知的レベル等の標準検査は実施していないが、いずれも準ずる教育課程を履修していた。

(3) 通常学級在籍児：本研究の通常学級在籍児は、全員がX盲学校に毎週1回通級する形態の教育相談を受けていた。その内容は、点字の読み書きの他、算盤、理科の実験、歩行などの指導であった。Table 1に、教育相談で実施した指導の概要と保護者の感想を示した。なお、中学は全員が盲学校へ進学していた。

### 2. 読材料

毎年3回の校内点字競技会速読の部で使用した読材料は、文部科学省著作点字教科書の原典となっていた光村図書以外の国語教科書やその他の低学年用の読み物（説明文）から精選し、これらを点訳して作成した。毎回、1年から6年まで同一の課題文を使用した。対象児が在学中に同一の読材料にあたらないよう6年間18回分を準備した。

これらの読材料をパソコン点訳し、点字プリンター（NEW ESA721, ジェイ・ティー・アール）で片面（32マス17行）に印刷した。1ページの文字数はカナ文字（墨字）換算で300～350文字であった。測定に使用した課題文の一例をTable 2に示す。これは点字表記にしたがってカナ文字に変換したものであり、右端の数字は、当該行の文字数と文頭からの累計文字数とマス数を示す。速読の測定には文字数（音節数）とマス数が使用されるが、本論では文字数を用いた。参考のためマス数も併記した。マス数は、マスあけを含め、行頭から当該行末までをカウントした。Table 2の読材料で両者を比較すると、マス数は文字数のおよそ35%増となっている。なお、内容の理解は問うておらず、読材

## 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童における点字読速度発達の比較

Table 1 通常学級在籍児に対する指導の概要と保護者の感想

- 原則週1回の頻度で盲学校へ通級してもらい、2時間の指導を行った。
- 指導内容は、点字の読み書き、歩行、珠算、地図の読み取りなど、盲学校の自立活動の内容と教科の補充を行った。
- 点字に関する指導内容は、タイプライターや点字盤の使い方、点字の正しい表記の仕方であり、学年に応じて指導を行った。さらに盲学校在籍児と同様に、毎学期末の点字競技会に参加した。
- 点字図書の貸し出しを積極的に促した。
- 盲学校での点字指導に関して、保護者から以下の感想が寄せられた。
  - ・親や在籍校教員では不足だった点字指導は本当に助かった。
  - ・点字の読み書きができるようになり、点字本や作文が好きになった。少しずつ勉強に対する取り組みの態度が意欲的になった。
  - ・盲学校在籍児と一緒に学習することで、目安になった。

Table 2 課題文の一例（採点用紙から）

	文字数	マス数
にほんざるの むれわ まいにち たべものを	18	25
さがして やまの なかを うごきまわります。 きょーも	22/40	30/55
みんなで にぎやかに よびあいながら もりの	19/59	26/81
はずれに やって きました。 そこでわ そろそろ	20/79	26/107
おいしい くさいちごが みを つけはじめて いる	20/99	27/134
はずです。	5/104	7/141
おかあさんの さるが むちゅーに なって くさいちごの	22/126	31/172
みを たべて います。 あかちゃんわ あかい きれいな	21/147	30/202
みが ほしくて たまりません。 てを だして とろーと	22/169	28/230
します。 ふだんわ やさしい おかあさんも たべて いる	23/192	32/262
ときに じゃま されると おこります。 いきなり あかちゃんの	24/216	32/294
てを ひっぱり かむ まねを して おどしました。 ぎゃあ	22/238	32/326
ごめんなさい。 ああ こわかった。 どーして あんなに	23/261	32/358
おこるんだろー。 あかちゃんわ きゅーに つまらなく なって	24/285	32/390
あたりを みまわしました。 あれ あの こわ どこえ	21/306	28/418
つれに いて もらうのかな。	13/319	15/432

料の詳細な難易度の検討は実施していない。

### 3. 測定の方法

年3回実施した点字競技会のうち、3学期末に測定した値をその学年における代表値とした。

読み方は、読材料の1行目行頭に両手の人差し指を置かせ、できるだけ速く音読するように

指示した後、普段の読書習慣にしたがって音読させた。「用意」の合図で上記の姿勢をとらせ、「はじめ」の合図で読材料を音読させ、1分後に「やめ」の合図で音読を中止させた。この間にあらかじめ準備しておいた採点用紙を用い、1分間に読んだ正答文字数（文字／分）を算出した。

## Ⅲ. 結果

## 1. 全対象児の読速度の発達

Table 3は、対象児を盲学校在籍児と通常学級在籍児に分類し、全対象児における6年間の読

速度を示したものである。また、就学の場別に各学年の平均読速度と標準偏差、および中央値と最高読速度・最低読速度を求めた。

ここで盲学校と通常学級在籍児の各学年にお

Table 3 全対象児における6年間の読速度

		(文字/分)						
対象児		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
盲 学 校 在 籍 児	1	23	67	153	185	185	225	
	2	53	132	148	183	169	216	
	3	10	88	149	215	224	265	
	4	80	162	210	215	224	371	
	5	114	92	143	200	193	214	
	6	94	173	232	262	343	321	
	7	60	208	236	310	274	301	
	8	4	44	153	218	268	288	
	9	23	83	171	206	291	272	
	10	80	119	174	195	242	242	
	11	48	108	155	218	260	210	
	12	148	246	264	224	249	347	
	13	71	96	143	161	178	245	
	14	60	107	162	213	224	240	
	15	98	126	175	196	240	250	
	16	34	154	152	232	289	258	
	17	50	108	149	182	189	247	
	18	52	138	157	215	321	285	
	19	3	125	91	118	198	194	
	20	41	67	139	152	215	230	
	21	59	82	91	126	144	210	
	22	32	81	142	258	200	292	
	23	126	220	272	327	381	344	
	24	90	134	208	244	279	283	
	25	24	45	66	127	135	210	
	26	46	89	120	150	158	193	
	27	81	97	130	140	179	215	
	28	46	65	94	135	138	170	
	29	40	79	111	148	157	178	
	30	26	113	161	161	215	212	
	31	93	186	199	257	274	329	
	32	10	40	143	154	174	222	
	33	12	55	101	111	148	157	
平均読速度		55.5	113.0	157.4	195.1	223.0	249.6	
標準偏差		35.7	50.4	47.4	52.2	60.4	52.7	
中央値		50	107	152	196	215	242	
最高読速度		148	246	272	327	381	371	
最低読速度		3	40	66	111	135	157	
通 常 学 級 在 籍 児	1	14	97	107	108	194	202	
	2	50	96	90	130	166	179	
	3	19	81	98	124	188	176	
	4	71	92	141	154	207	177	
	5	80	107	88	145	177	194	
	6	77	77	127	164	222	250	
	7	26	121	144	111	192	252	
	平均読速度		48.1	95.9	113.6	133.7	192.3	204.3
	標準偏差		26.4	13.9	21.9	19.8	17.1	30.8
	中央値		50	96	107	130	192	194
最高読速度		80	121	144	164	222	252	
最低読速度		14	77	88	108	166	176	

## 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童における点字読速度発達の比較

ける読速度についてコルモゴロフ・スミルノフ検定による正規性の検定を行った結果、いくつかの学年に正規性が認められなかった。そこで各学年の読速度の比較にはフリードマン検定を用いた。その結果、学年の効果は有意であった ( $\chi^2(5)=181.52, p<.01$ )。シェッフエの対比較によれば、隣接学年を除く学年間の読速度の差が有意であった (1年と3年  $\chi^2(5)=21.79$ , 1年と4年  $\chi^2(5)=51.15$ , 1年と5年  $\chi^2(5)=95.75$ , 1年と6年  $\chi^2(5)=123.91$ ; 2年と4年  $\chi^2(5)=20.42$ , 2年と5年  $\chi^2(5)=51.15$ , 2年と6年  $\chi^2(5)=72.22$ ; 3年と5年  $\chi^2(5)=26.18$ , 3年と6年  $\chi^2(5)=41.78$ ; 4年と6年  $\chi^2(5)=15.84$ , いずれも  $p<.01$ )。

## 2. 盲学校および通常学級在籍児童の読速度の発達

ここでは入学時から盲学校に在籍していた児童33人と通常学級に在籍した児童7人の2群に分類して点字読速度の発達を検討した。

(1) 盲学校在籍児童: Fig. 1の■で示したのが、盲学校在籍児童の結果である。

1年時の平均読速度は55.5文字/分 ( $SD=35.7$ )、また中央値は50文字/分、最高読速度は148文字/分、最低読速度は3文字/分であった。

2年時の平均読速度は113.0文字/分 ( $SD=$

50.4)、また中央値は107文字/分、最高読速度は246文字/分、最低読速度は40文字/分であった。

3年時の平均読速度は157.4文字/分 ( $SD=47.4$ )、また中央値は152文字/分、最高読速度は272文字/分、最低読速度は66文字/分であった。

4年時の平均読速度は195.1文字/分 ( $SD=52.2$ )、また中央値は196文字/分、最高読速度は327文字/分、最低読速度は111文字/分であった。

5年時の平均読速度は223.0文字/分 ( $SD=60.4$ )、また中央値は215文字/分、最高読速度は381文字/分、最低読速度は135文字/分であった。

6年時の平均読速度は249.6文字/分 ( $SD=52.7$ )、また中央値は242文字/分、最高読速度は371文字/分、最低読速度は157文字/分であった。

回帰直線は  $y=38.23x+31.78$  であり、相関係数は  $r=.98$  を示し、有意であった ( $F(1,5)=128.93, p<.01$ )。

次に各学年の読速度についてフリードマン検定を行った結果、学年の効果は有意であった ( $\chi^2(5)=145.52, p<.01$ )。シェッフエの対比較に

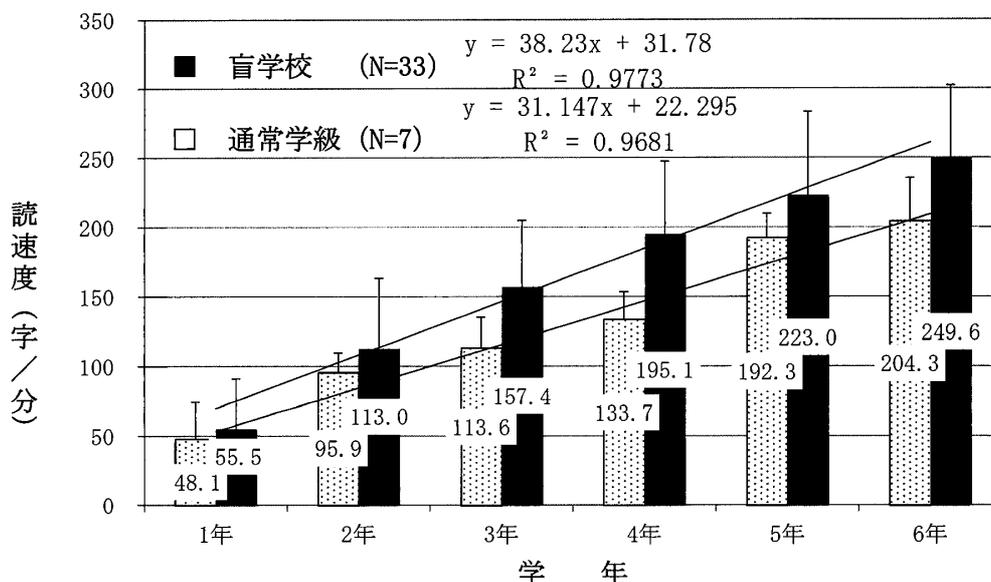


Fig. 1 盲学校在籍児と通常学級在籍児との点字読速度発達の比較

よれば、隣接学年を除く学年間の読速度の差が有意であった（1年と3年  $\chi^2(5)=18.05$ , 1年と4年  $\chi^2(5)=42.99$ , 1年と5年  $\chi^2(5)=75.65$ , 1年と6年  $\chi^2(5)=98.71$ ; 2年と4年  $\chi^2(5)=18.33$ , 2年と5年  $\chi^2(5)=41.25$ , 2年と6年  $\chi^2(5)=58.69$ ; 3年と5年  $\chi^2(5)=19.80$ , 3年と6年  $\chi^2(5)=32.34$ ; 4年と6年  $\chi^2(5)=11.42$ , いずれも  $p<.01$ ）。

(2) 通常学級在籍児童：通常学級在籍児童の結果は、Fig. 1に□で示した。

1年時の平均読速度は48.1文字／分 ( $SD=26.4$ )、また中央値は50文字／分、最高読速度は80文字／分、最低読速度は14文字／分であった。

2年時の平均読速度は95.9文字／分 ( $SD=13.9$ )、また中央値は96文字／分、最高読速度は121文字／分、最低読速度は77文字／分であった。

3年時の平均読速度は113.6文字／分 ( $SD=21.9$ )、また中央値は107文字／分、最高読速度は144文字／分、最低読速度は88文字／分であった。

4年時の平均読速度は133.7文字／分 ( $SD=19.8$ )、また中央値は130文字／分、最高読速度は164文字／分、最低読速度は108文字／分であった。

5年時の平均読速度は192.3文字／分 ( $SD=17.1$ )、また中央値は192文字／分、最高読速度は222文字／分、最低読速度は166文字／分であった。

6年時の平均読速度は204.3文字／分 ( $SD=30.8$ )、また中央値は194文字／分、最高読速度は252文字／分、最低読速度は176文字／分であった。

回帰直線は  $y=31.147x+22.295$  であり、相関係数は  $r=.97$  を示し、有意であった ( $F(1,5)=90.90$ ,  $p<.01$ )。

次に各学年の読速度についてフリードマン検定を行った結果、学年の効果は有意であった ( $\chi^2(5)=28.12$ ,  $p<.01$ )。シェッフエの対比較によれば、1年と5年 ( $\chi^2(5)=15.56$ ,  $p<.01$ ) および1年と6年 ( $\chi^2(5)=18.09$ ,  $p<.01$ ) の読速度に有

意差がみられ、その他の学年間では有意でなかった。

(3) 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童の読速度の比較：ここでは、就学の場合（盲学校と通常学級）の違いによる学年間の読速度を比較した。

各学年別に、就学の場合（盲学校と通常学級）の読速度についてマン・ホイットニーのU検定を行った結果、3年 ( $z=2.78$ ,  $p<.01$ )、4年 ( $z=2.90$ ,  $p<.01$ )、および6年 ( $z=2.12$ ,  $p<.05$ ) で両者の読速度の差が有意であったが、1年 ( $z=0.24$ ,  $p>.10$ )、2年 ( $z=1.22$ ,  $p>.10$ )、5年 ( $z=1.19$ ,  $p>.10$ ) は有意でなかった。

#### IV. 考察

##### 1. 対象児

本研究では小学生の点字読速度発達の概要の把握、すなわち資料的意義を第1の目的としたが、継続して読速度のデータが得られたのは17年間でわずかに40人であった。この他に、教育課程が「下学年適応」の対象児や、「準ずる」教育課程であっても一部のデータが欠落した対象児がのべ120人余りがおり、それらを活かすことができなかった。しかし、全国盲学校小学部の在籍状況を考えあわせると、資料的価値はあると考える。また、対象児に知能検査などの標準検査は実施できなかった。現在、全員が成人し、大学もしくは盲学校専攻科に進学後、教員や理療師として社会的に自立しており、「準ずる」教育課程の妥当性はあると判断した。

##### 2. 6年間の読速度発達

6年間の発達をみると、盲学校在籍児も通常学級在籍児のいずれもほぼ直線的な発達をしていることが指摘できる。1年1学期は、文字の弁別や行移し運動など点字触読導入の指導が主となる。一定程度の速さでどうにか文章を読むことができ、点字教科書を使用した学習が可能になるのは、早くて1学期の半ば、遅い場合は2学期になることも珍しくない。点字指導書（文部科学省, 2003）には入門期の学習終了時の読速度が示されており、これによれば1分間

## 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童における点字読速度発達の比較

に150マスとある。これはおよそ100～120文字に相当する。本結果では盲学校在籍児は2年終了時点、通常学級在籍児では3年終了時点でようやくこの目安に到達できると言える。その後は、1年間に30文字から40文字のペースで伸長していた。墨字と異なり、漢字のないカナ表記の点字は一端文字を習得すれば高学年の内容も読むことが可能であり、このことは漢字のない点字の利点とも言えよう。なお、同じ手続きで検討し牟田口・中田(1997)の結果と比較すると、同様の結果となった。さらに佐藤(1984)は盲学校の児童生徒1,290名を対象に実施した点字読速度発達の研究から、学年が進むにつれて読速度は速くなること、小学校1年から4年までの発達が著しく、その後発達の速度は緩慢になることを指摘している。佐藤(1984)の読速度測定は課題文を黙読させた後で理解度を問う方法であり本調査とは異なるが、学年が進むにつれて読速度は速くなるという結果は同じであった。

### 3. 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童との比較

通常学級の対象児は、X盲学校が昭和60年度から「盲学校のセンター的機能」の一環として先導試行的に取り組んできた通級指導対象の盲児である。彼らは週1回の頻度で来校し、点字を始め歩行や触察など、在籍する小学校では指導が行き届かない、盲児に必須であるスキルの獲得を目指していた。結果は極めて興味深いものとなった。それは盲学校在籍児童では隣接学年を除く学年間の読速度に有意差があったのに対し、通常学級在籍児童では1年と5年および1年と6年の読速度間にしか有意ではなかったことである。このことは通常学級在籍児童が盲学校在籍児童に比べて、6年間の読速度発達が緩やかであることを示しており、これは両者の回帰直線の傾きの違いからも指摘できる。さらに、同学年における両者の読速度を比較すると、低学年ではその差は見られないが、中学年以降になると両者の読速度に有意差が現れている。盲学校在籍児童は小学部入学後から点字触読指

導を開始することが多い。通常学級在籍児童の場合、小学校には指導できる教師がいないことに加え、すぐに晴眼児と一緒に教科指導を受けることができるよう、小学校就学前に点字導入指導が行われることが多い。したがって、低学年で読速度に差が見られなかったことはその就学前指導の成果の現れではないかと推察される。今回の通常学級在籍児童は継続して盲学校の教育相談を受けており、その指導は点字読みの向上を最重点事項としていた。換言すれば、盲学校在籍児童と同じ指導を受けていたと言える。それでも学年が進むにしたがって読速度に差が出たのは、点字使用の頻度によるものと推察される。ある通常学級在籍児童は、小学校で点字を使用するのは教科書を読むときに限られ、テストや作文など、担任教師に提出するのは全て通常の文字(墨字)であった。また盲学校に来る楽しみを、「盲学校には点字図書がたくさんあり、それを借りられること」と答えた盲児がいた。

今回取り上げた通常学級在籍児童は盲学校の指導を受けることができていた。しかし現在の盲学校では、センター的機能を担う教師でさえ、過去に点字導入の指導経験がない場合があるという。このような盲学校教師の専門性の課題に加えて、加藤(2013)は「小学校入学時は弱視で墨字教科書を拡大して使用していても、10歳頃から点字教育が必要な児童に点字教科書が行き渡っていないのではないかと、盲学校ではまがりなりにも墨字から点字への順次移行を図っていこうとするが、一般校では巡回教員がいてもそこまでの時間がとれず、不十分なままになっている、英語教育の低年齢化も進もうとしている中で、英語を始め数学式や楽譜も含めた専門的な点字指導がおざなりになっている」ことを指摘した。我が国もインクルーシブ教育への方向に向かう中、盲児童数の激減と盲学校教師の専門性を含めた点字教育に関する課題が今後顕在化することが容易に予想される。

## 文献

- 加藤俊和 (2013) 第25回視覚障害教科教育・点訳研究会発表資料 (2013年7月29・30日, 名古屋市).
- 道村静江 (2004) 点字導入の読み書き指導及び点訳便利帳2003年版の紹介. 視覚障害教育, 97, 45. 全日本盲学校教育研究会.
- 文部科学省 (2003) 点字学習指導の手引 (平成15年改訂版). 大阪書籍.
- 文部科学省 (2009) 特別支援学校学習指導要領解説総則等編 (幼稚部・小学部・中学部). 教育出版.
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2011) 文部科学省著作教科書 特別支援学校小学部視覚障害者用こくご1-1. 日本ライトハウス.
- 文部科学省 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告). 特別支援教育の在り方に関する特別委員会. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm) (閲覧日 2013-10-19)
- 牟田口辰己・中田英雄 (1997) 盲児の点字読速度の発達. 特殊教育学研究, 35, 2, 11-18.
- 牟田口辰己・大内 進・野田佑治・金本りせ子・佐藤光子 (1995) 盲学校における通級による指導に関する実践的研究. 視覚障害, 135, 1-21.
- 牟田口辰己・進 和枝 (2012) 盲学校における点字触読導入指導に関する研究 (1) -全国盲学校への対象児に関する調査から-. 日本特殊教育学会第50回大会論文集, USB版.
- NHKテレビ「友だち100人できるかな」(NHK総合, 1976, 2003年11月3日再放送)
- 佐賀県立盲学校 (2013) 平成24年度研究報告. 佐賀県立盲学校.
- 佐藤泰正 (1984) 視覚障害児の読書速度に関する発達的研究. 学芸図書.
- 全国盲学校長会 (2013) 全国盲学校長会の活動Q&A. <http://www.zentoku.jp/dantai/mou/> (閲覧日 2013-8-10)

—— 2013.8.17 受稿、2014.1.9 受理 ——

## **Comparison of Braille Reading Speed Progress between Pupils Attending a School for the Blind and Regular Schools**

**Tatsumi MUTAGUCHI**

The progress of blind children in Braille reading speed was investigated in pupils attending schools for the blind and regular schools. The subjects were 40 elementary school pupils: 33 who attended a school for the blind and 7 who attended regular schools. Their Braille reading speed data were obtained for six consecutive years during the period from April 1985 to March 2002. The reading speed of both pupils in schools for the blind and pupils in regular schools increased with the school year. The reading speed of pupils in the school for the blind was significantly different between all school years except for adjacent school years. In contrast, in pupils in regular schools significant differences were seen between first grade and fifth grade and between first grade and sixth grade only. There were no significant differences between any other school years. In a comparison of pupils in the school for the blind and pupils in the regular schools, there were no significant differences in reading speed in the first grade, second grade, or fifth grade, but there were significant differences in reading speed in the third grade, fourth grade, and sixth grade.

**Key words:** blind children, Braille reading speed, school for the blind, regular school